

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当	
A-142	A-11C	24-010	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)			
Prevalence and Correlates of Post-Diagnosis Alcohol Use among Cancer Survivors がんサバイバーにおける診断後のアルコール使用率と関連要因			
執筆者			
Heffner JL, Ton M, Jones SMW, Malen RC, Cohen SA, Newcomb PA.			
掲載誌			
Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. 2024 Apr 3;33(4):600-607. doi: 10.1158/1055-9965.EPI-23-1155.			
キーワード			PMID
飲酒、アルコール、アルコール使用障害、がんサバイバーシップ、がん予防			38294685
要旨			
<p>背景: 本研究は、確定がん症例を対象とした集団ベースの研究によって、がん生存者における飲酒の程度を推定し、それぞれの飲酒レベルに関連する人口統計学的、行動学的、臨床的要因を明らかにすることを目的としている。</p> <p>方法: 米国ピュージェット湾地域の地域がん登録 (SEER) を用いて、がん診断時の年齢が 21~74 歳で、募集期間開始時 (2020 年 4 月~2020 年 12 月) に診断後 6~17 ヶ月であったがんサバイバーを対象とし、調査票が回収された 1,488 名を解析対象とした。がんと診断されてからの飲酒の頻度と量はアルコール使用障害識別検査 (Alcohol Use Disorders Identification Test-Consumption: AUDIT-C) の質問に「がんと診断されてから」を追加し活用した。AUDIT-C 女性 3 点以上、男性 4 点以上を危険飲酒と定義した。がん診断後のアルコール使用の有病率、ならびに 3 つの飲酒レベル (飲酒あり、がん予防ガイドラインを超える飲酒、危険飲酒) の人口統計学的、行動学的、臨床的関係をロジスティック回帰分析によりオッズ比 (OR) および 95%信頼区間 (CI) を算出した。</p> <p>結果: 対象者の基本属性は 55 歳以上が 71.3%、女性が 56.5%であった。飲酒率、がん予防ガイドラインを超える飲酒率、危険飲酒率は、それぞれ 71%、46.2%、31.6%であった。高所得 (世帯年収 10 万ドル以上) は飲酒あり (OR1.84; 95%CI[1.29, 2.64])、がん予防ガイドラインを超える飲酒 (OR1.78; 95%CI[1.27, 2.50])、危険飲酒 (OR1.60; 95%CI[1.11, 2.31])のすべての OR 上昇と関連し、大麻使用も飲酒あり (OR1.52; 95%CI[1.11, 2.06])、がん予防ガイドラインを超える飲酒 (OR1.73; 95%CI[1.32, 2.28])、危険飲酒 (OR 1.94; 95%CI[1.46, 2.57])のすべての OR 上昇と関連していた。身体的 QOL が低いこと、大腸直腸を除く消化器がんであること、最近 1 ヶ月以内に化学療法を受けていることは、3 つの飲酒レベルすべてのオッズ比低下と関連していた。</p> <p>結論: 飲酒率およびリスクのある飲酒率は先行研究よりも高く、社会人口統計学的因子、物質使用因子、がん関連因子によって異なっていた。この知見は、がん治療環境におけるリスクのあるアルコール使用の特定と対処の重要性を示唆している。</p>			